

---

# 巻頭言

## 特集 新しい現代中国研究の展開 「収」のなかの知の再編 ——現代中国研究はいま何を問い直しているのか

KEIO SFC JOURNAL Vol.25 No.2 特集編集委員

### 加茂 具樹

慶應義塾大学総合政策学部長 教授

1980年代、中国が対外開放と国内改革の道を選択して以来、社会科学における中国への学術的関心は急速に拡散し、多様化を遂げてきた。研究者は、一党支配体制の持続、持続的成長のメカニズム、そして既存の国際秩序を揺るがすアクターとしての台頭という様々な「問い」と向き合っている。さらに研究者はいま、新しい課題と向き合っている。利用可能な史資料、採用する研究手法、さらには調査研究を実施する環境の非連続的な変化である。現代中国研究は、まさに新しい局面に立たされている。

#### 変容の起点：研究条件の構造的転換

近年、国際的な中国研究において、そのパラダイム・シフトに関する議論が活発に行われている。ここでいう「パラダイム・シフト」とは、単なる理論の流行や対象の変化を指すものではない。中国研究を取りまく環境そのものが大きく変化し、既存の研究伝統から別の研究伝統への転換の必要性が、研究者のあいだで意識的に議論されるようになっていくことを指している。研究の前提や倫理に至るまで、学問としての存立基盤そのものが、構造的な転換を迫られているのである。

この変容を決定づけたのは、研究対象の内面的な変化以上に、「研究が成立するための諸条件」の非連続的な断絶である。その最も顕著な表れが、研究アクセスの難易度の急速な高まりである<sup>1</sup>。過去数十年にわたる中国の「放(開放)」の時代が終わりを告げ、「収(閉鎖)」への潮流が加速するなかで、現地調査は困難を極め、情報の「黒箱化(ブラックボックス化)」が急速に進んでいる<sup>2</sup>。もとより不透明であった政策決定過程を外部から把握することは、いまや一層困難となった。

公式文書、統計、檔案館(アーカイブ)史料、回顧録へのアクセスの低下やインタビューの実施も難度を増している。その結果、フィールドワークを実施する環境は制限されている。長らく緻密な実証と現地の人脈を強みとしてきた日本の中国研究の基盤は、いま大きく動揺している。インターネットを介した多様なデータの収集と実証分析は可能ではあるが、研究の血肉となる「現場感覚」の欠落は、一時的な制約ではなく構造的かつ長期的な変化として認識されるべきであろう<sup>3</sup>。

### 再帰的な観察：「国家」という能動的主体

いま一つの本質的な変化は、国家による研究環境への介入が深化している点にある。ここにおいて中国という国家とは、もはや単なる「分析対象」にとどまらない。研究がいかなる条件で成立するかを左右する強力な「行為主体(アクター)」として、以前よりも力強く振る舞っている<sup>4</sup>。

第一に、国家はデータの「生成者」として、統計や公式文書、公式言説を戦略的に設計し、研究者の視界を制御している。研究者は与えられたデータを分析するだけでなく、「なぜそのデータがその形で提示されているのか」を同時に考えざるを得ない。この色彩は強まった。第二に、国家は「倫理の再定義者」として、資料利用や共同研究の境界線を政治的に引き直し、学術的誠実さと政治的リスクの狭間で、研究者に不断の決断を更に迫るようになってきている。第三に、国家は海外研究者への「シグナリング主体」として、インタビュー調査、会議への招聘の可否を通じ、許容される言説の枠組みを暗黙のうちに規律している。現実にはそうした意図がなかったとしても、受け手はそう意識するようになった。

こうした環境下で、中国研究はもはや一方向的な観察ではありえない。研究者は「国家に観察され、その反応を意識しながら国家を観察する」という、極めて再帰的(reflexive)状況に置かれている。この構図を自覚しない研究は、分析の前提そのものを国家の意図に委ねてしまう危険を孕んでいる<sup>5</sup>。近年、「国家に観察されながら国家を観察する」段階に、さらに深く入り込んだとあってよい<sup>6</sup>。

### 崩壊した前提：移行論の終焉

これまで国際的な中国研究を支えてきたのは、必ずしも明示されてきたわけではないが、いくつかの重要な前提であった。第一に、歪みや制約を伴いながらも、長期的には改善されるであろうという「透明性への期待」である。改革開放以降の中国研究は、統計や公式文書に歪みや制約があることを前提としつつも、複数の情報を突き合わせ文脈を精読することで、政治や社会の実態を把握できると考えてきた。制度についても、形式的で未成熟

---

ではあるが、実質的な機能を備え、長期的には開放と制度化が進むという期待が、暗黙のうちに共有されていた。第二に、制度化や多元化を経て、最終的には民主化という普遍的な地平へと至るであろう「移行論的時間感覚」である。権威主義体制が経済発展や社会の多元化の果てに、最終的には民主化へと向かうという時間の矢印が、暗黙のうちに研究の背景に置かれてきた。この二つの前提は、不透明な中国政治を動的に把握するための「補助線」として機能し、一定の説明力を持っていた。しかし今日、透明性が改善されるという想定は棄却され、民主化へ向かう直線的な時間の矢印も折損したとあってよい。現在の中国研究は、これらの「時間の重力」から突き放された地点から、改めて分析の足場を問い直す必要に直面している<sup>7</sup>。

この状況は、中国研究に対し、分析の出発点そのものを問い直すことを要請している。現段階においては、将来的な透明性の改善や民主化への移行を暗黙の前提として、現在を位置づけることはできない。中国研究は、移行の途上としてではなく、体制の持続や適応、再編そのものを分析の対象とする地点へと移行している。ここにおいて問われているのは、「いつ、どのように移行するのか」ではなく、「いかなる条件のもとで、どのように支配が再編され、持続しているのか」という問いである。

### 三つの転換：認識・方法・規範

現在進行している中国研究のパラダイム・シフトとは、単一の理論転換を指すのではなく、相互に関連する複数の次元で進行している変化の総体である。以下、その中核をなす三つの転換——認識論的転換、方法論的転換、規範的転換——を整理する。第一に、認識論的転換である。研究者は、何が観測可能で、何が観測不可能なのかを所与の前提として受け取ることが、より困難になっている。不完全な情報、沈黙、曖昧さ、さらには統計や公式言説の欠落や歪みそれ自体が、偶発的なノイズではなく、政治的に生産された結果として分析の対象となりつつある。中国研究においては、何が語られているかだけでなく、何が語られていないのか、いかに沈黙が構成されているのかを問う視点が、一層に不可欠となっている。

第二に方法論的転換である。物理的アクセスが制約されるなかで、衛星画像解析や AI を用いた大規模データのスクレイピングなど、デジタル技術を活用した分析手法が台頭している。しかし同時に、データの断片化が進むほど、情報の背後にある歴史的文脈や、中国共産党特有の言語空間（いわゆる中国共産党の言説体系であり、the Party's discursive system のこと）を読み解く高度な人文知的なリテラシー（党史への理解の必要性）が再評価されている<sup>8</sup>。中国共産党の政策文書や指導者の言説、制度運用の痕跡といったテキストや実践の精査は、比較権威主義や歴史的視点との接続を通じて、新たな分析可能性を開いている<sup>9</sup>。経験的なフィールドワークを、デジタルな遠隔探査と深層的なテキスト解読が互いに補完し得るかが、研究の質を左右する重要な課題となっている。

第三に、規範的転換である。中国研究は、対象を理解するための学問であるのか、それとも警戒や政策形成に資する知識を体系化させた学問として位置づけられるべきなのかという目的意識が、改めて問われている。学術研究と安全保障的関心との距離の取り方は、今日、避けて通れない争点となっている。とりわけ、中国研究が、研究者自身の意図に反して、国家の戦略的優位を確保するためのインテリジェンスへと回収され、学問が手段化されるリスクが意識されている。対象への共感的理解を重視してきた従来の研究伝統と、リスク管理を前提とする現代的要請とのあいだで、研究者は自らの立ち位置を不断に問い直す倫理的転換を迫られている。そこには伝統的な地域研究への批判的な議論もあれば、地域研究という領域横断、学際的な研究を評価する議論もある。

### 揺らぎ続ける中間状態

重要なのは、中国研究においてすでに完成された「新しい研究伝統」が存在するわけではないという点である。現在はむしろ、旧来の前提が機能不全を起こしつつある一方で、それに代わる安定した枠組みが確立していない移行期、あるいは「中間状態」にある。

フィールド中心主義は相対化され、制度や言説、比較分析が重視されるようになったが、それは旧来の方法を全面的に否定することを意味しない。また、民主化を前提とする移行論は後景化し、体制の持続や適応、再編に注目が集まっているものの、その評価軸は依然

---

として定まっていない<sup>10</sup>。さらに、データの信頼性を前提とする分析から、データがいか  
に生成、選別され、操作されるかを問う「データの政治学」への関心も高まりつつある。  
現在の中国研究は、確立された新パラダイムの時代ではなく、前提が揺らぎ続ける中間状  
態にあるといえる。現在は「わからなさ」を理論化する段階にある。しかし、この「揺ら  
ぎ」や「不透明さ」を、単なる研究上の困難や欠如としてのみ捉えるべきではない。それ  
らは、中国という存在が内包する新たな政治性が、研究の条件そのものに刻印されてい  
ることの表れでもある。前提を自明視できなくなったこの地点から、研究者はいかなる問い  
を立て、いかなる方法と規範を選び取るのかが、あらためて問われている。

本特集の試みは、こうした揺らぎや不透明さを正面から引き受けつつ、躍動する現代中  
国研究の現在地を総括し、その先に開かれうる研究の地平を描き出すことにある。新しい  
秩序の萌芽は、既存の秩序が後退していく過程において現れる。前提を自明視できなくな  
った時代において、次なる中国研究はいかなる姿を取り得るのか。本特集に所収された各論  
考は、この問いを意識的に、あるいは無意識的に共有している。本特集を通じて、次の中  
国研究の姿をめぐる議論を深めるための一助となれば幸いである。

#### 注

- 1 問題は「調査できる人がいるか」ではなく、研究が再生産可能かどうかである。日本を含む海外の若手研究者が現地経験を積めない構造は分野の長期的衰退を招く懸念がある。そうした意味において現代中国研究におけるフィールド中心主義は制度的に限界を迎えているのではないかという問題提起的な語彙選択をした。
- 2 中国におけるアーカイブリサーチ、エスノグラフィーやインタビュー調査をはじめとする研究方法論を論じた研究として、以下のようなものがある。Heimer, M. and Thogersen, S. (2006) *Doing Fieldwork in China*, Hawaii: University of Hawaii Press. Carlson, A., Gallagher, M. E., Lieberthal, K., Manion, M. (2010) *Contemporary Chinese Politics: New Sources, Methods, and Field Strategies*, Cambridge: Cambridge University Press. いずれも中国語に翻訳されている。瑪麗亞・海默、曹詩弟主編 于忠江、趙晗訳 (2012) 『在中國做田野調查』重慶大學出版社。寇艾倫、高敏、李侃如、墨宇主編、許安結、趙明昊、張勇訳 (2014) 『当代中國政治研究 新材料、新方法和實地調查的新途徑』中國社會科學出版社。
- 3 一方で、アクセスの制限は、研究の関心を中国国内から、その影響力が溢れ出す『外』の世界、すなわち『グローバル・チャイナ』へと向かわせている。一帯一路の沿線諸国やサイバー空間、国際機関における中国の振る舞いは、国内調査が困難となった現在、中国の国家像を逆照射する重要なフィールドとなりつつある。
- 4 むろん現代中国研究において、「国家の研究環境への介入」は近年になって観察されるようになったわけではなく、それは従前からそうであった。したがって本稿は「介入の深化」と表現した。

- 5 ただし「国家に観察され、その反応を意識しながら国家を観察する」という構図は、直近の中国研究だけの問題ではなく、従来からの課題である。こうした問題を意識していない中国研究者はいない。現在は、その程度が高まったに過ぎない。
- 6 こうした認識は、例えば日本において以下のような研究成果を生んでいる。伊藤亜聖、林載桓、于海春、御器谷裕樹 (2025) 「日本版中国研究者調査 2025 ー概要と速報ー」『IIS Discussion Paper Series』J-255. <https://issnews.iss.u-tokyo.ac.jp/2025/05/AseiIto202505.html>
- 7 民主化への時間の矢印は、経験的に相対化したとあってよい。もちろん従来のような単線的な移行論ではなく、多様な移行経路ということで再定義は可能かもしれない。
- 8 例えばこのような研究がある。Roberts, M. E. (2018) *Censored: Distraction and Diversion Inside China's Great Firewall*, Princeton University Press.
- 9 ジョンズ・ホプキンス大学 SAIS 中国研究センターが提示した *Studying China in the Absence of Access: Rediscovering a Lost Art* という問いである。これは、アクセスが不可能であった 1960 年代から 70 年代にかけて、先達が培った厳密な文書分析やプロパガンダ読解といった Lost Art を、現代の高度な情報技術と融合させ、学術的生命力を復興させる必要性を訴える。Mertha, A. ed. (2024) *Studying China in the Absence of Access: Rediscovering a Lost Art* (SAIS China Research Center Publication Number 1), SAIS China Research Center. URL:[https://scgrc.sais.jhu.edu/wp-content/uploads/2024/10/32026\\_JOHNS\\_HOPKINS\\_COVER\\_SP.pdf](https://scgrc.sais.jhu.edu/wp-content/uploads/2024/10/32026_JOHNS_HOPKINS_COVER_SP.pdf) また、日本の近現代中国政治史の研究コミュニティは、改革開放という時代を歴史化する試みを提起している。例えばこのような研究がある。中村元哉編 (2023) 『改革開放萌芽期の中国——ソ連観と東欧観から読み解く』晃洋書房。
- 10 筆者の研究関心はこの点に位置付けられる。拙著 (2013) 「現代中国における民意機関の政治的役割——代理人、諫言者、代表者。そして共演」『アジア経済』54(4), p.11-46. 拙著 (2020) 「継承された改革と継承されなかった改革——中国共産党が提起した社会協商対話制度と協商民主制度 (特集 2 : 天安門事件 30 周年 : 1980 年代中国からの問いかけ)」『アジア研究』66(3), p.68-85. 拙稿 (2025) 「学術研究と政策決定を架橋する地域研究——現代中国政治研究の視点から」『KEIO SFC JOURNAL』24(2), p.64-74.